

## 日本語とフランス語の視覚を表す凝結表現研究の現在

### L'état actuel de la recherche sur les unités figées exprimant la perception visuelle en français et en japonais

木島 愛 (Ai KIJIMA)

En préambule de l'étude comparée des unités figées, le présent article passe d'abord en revue les terminologies et définitions qui varient selon les chercheurs. Nous regardons ensuite les descriptions fournies par les dictionnaires et analysons l'utilisation dans le corpus des verbes visuels en tant qu'échantillons. A la lumière des recherches actuelles sur le figement, nous essayons de comprendre ce type d'utilisation dans le but de l'appliquer à notre analyse.

Nous traitons les dictionnaires monolingues et bilingues afin de comparer leur fonction et leur utilité. Afin de mieux comprendre le figement, cet article aborde le verbe visuel en japonais *miru*, en rassemblant les expressions figées qui contiennent ce verbe. Nous examinons deux types de phrases : « N *wo miru* » et « N *ni miru* » en insistant sur les propriétés de N.

キーワード：凝結表現 (unités figées / expressions figées), 視覚 (perception visuelle), 日仏対照 (comparaison franco-japonais)

#### 1. はじめに

フランス語の知覚動詞に関する研究は、現在に至るまで数多く行われてきた (Willems, 1983 ; Franckel et Lebaud, 1989, 1990 ; Dubois et Dubois-Charlier, 1997 ; Ozouf, 2004). これらの先行研究の分析は (i) 知覚動詞の統辞的特徴及び意味的特徴に関するものと (ii) 知覚動詞の多義性に関するものに大別できる. また, (i) の統辞的及び意味的特徴に関して, 派生的な言語現象まで網羅しようとする, 凝結表現<sup>1</sup>の問題に行き着くことになる. 例えば, フランス語の *voir* は (1a) のような基本的な使用<sup>2</sup>の他に, (1b, c) のような表現が存在する.

- (1) a. Marie voit très bien. (マリーは目がよく見える)  
b. Marie voit rouge. (マリーは激怒している)  
c. Marie en voit de belles. (マリーはひどい目に遭う)

<sup>1</sup> この「凝結 (figement)」は Gaston Gross (1996, 2012) が提唱している語彙文法理論 (lexique grammaire) において定義されている概念である (cf. 木島, 2016).

<sup>2</sup> ここではフランス語学習のテキストで最初に学ぶ表現に関して「基本的」という用語を使用した.

このような (1b, c) の表現は、その意味を知らなければ理解することも使用することも難しい「凝結表現」である。では、なぜこのような凝結表現を使用するのかというと、(i) 伝えたい意味の表現性を強化すること、(ii) 話し手と聞き手は共通の文化的言語的基礎がなければならず、言語行為の際に話し手と聞き手の相互に共通認識されるという2点が挙げられる (Grezka et Kijima, 2019)。凝結表現にはいくつかの特徴があり、まず一つ目に凝結度 (*degrés de figement*) あるいは統辞的硬化性 (*fossilisation*) が認められるという点が挙げられる。例えば、*voir le jour* (誕生する, 出現する) と *voir rouge* (激昂する) という2つの表現を比べると、後者の方が凝結度もしくは統辞的硬化性が高いと言える。というのも、*voir rouge* における *rouge* を形容詞であると捉えたと、文法規則として *voir* が属辞だけを伴うことはなく、*rouge* が名詞であると捉えたと、限定辞を伴わないということになる。どちらにしても、統辞的な規則に則っておらず、このような場合に凝結度もしくは統辞的硬化性が高いと言えることになる。次に、凝結表現の使用にも特徴があり、Maurice Gross (1982, 1988) は自由連辞よりも凝結表現の数の方が多いことを以前から指摘している<sup>3</sup>。3つ目に、この「凝結」という現象はあるいくつかの言語に限ったものではなく、あらゆる言語に見られる普遍的な現象であるという点があげられる。凝結表現の使用は、母語話者はもちろん、外国語学習者にとって言語理解および言語習得の困難さを引き起こす要因となっている。言語能力は、文法規則と語彙を覚えるだけでは十分ではなく、凝結表現を習得することによって言語能力が高いという評価に結びつくからである。以上の特徴から凝結表現の総括的な分析は必要であり、分析結果は言語理解にも重要な役割を果たすと考えられる。本稿では、これまであまり分析されることがなかったフランス語と日本語の動詞的凝結表現の対照研究を発展させる第一歩として、フランスと日本における凝結表現研究の現状を把握し、辞書記述を通して問題点を追究する。凝結表現研究として動詞句に焦点を当てたものが少ないことから、フランス語の動詞の中でも使用頻度が高く多義である視覚を表す動詞を例として取り上げることとした。また、凝結表現を扱った2ヶ国語以上の対照研究という点では、日本語と英語、中国語、ロシア語などとの対照研究は行われているが、日本語とフランス語の対照研究は身体名詞に限られており、動詞句を対象としたものはまだ行われていないという現状がある。特に動詞句に関する凝結表現の日仏対照研究は分析方法も定まっていないことから、知覚動詞を用いて動詞句に適応する具体的な分析方法を提示することを目指す。

## 2. なぜ知覚動詞なのか？

前述したように、知覚動詞に関する先行研究は数多く行われてきたが、これらを踏まえて知覚動詞を総体的に捉えた分析として Grezka (2006, 2009) と Kijima (2017) が挙げられる。しかし、これらの研究においても、凝結表現は例外として扱われてきたという現状がある。知覚動詞の中でも特に視覚を表す動詞は、五感の中でも対象が客観的に判断できる重要な情報源であり、他の感覚よりも視覚を表す語彙の方が使用頻度が高いという特徴がある。また、フランス語であれ

<sup>3</sup> Le nombre d'unités polylexicales (= unités figées) dépasse de très loin les unités monolexicales appartenant à la même partie du discours : noms, verbes, adjectifs, adverbes, déterminants, etc. (M. Gross 1982, 1988)

ば, *apercevoir*, *compléter*, *observer*, *regarder*, *viser*, *voir* など, 日本語であれば「見る」「見える」「眺める」「見つめる」「見渡す」などのように, 多くの動詞が存在する. その中でも, フランス語の視覚を表すプロトタイプの動詞である *voir* は様々な種類の構文において用いられる. 統辞的にも意味的にも多くのバリエーションがあるという点で, 今後他の動詞に分析を発展させていくためにも, まず視覚を表す動詞を分析対象とする.

## 2.1. フランス語の視覚動詞

ここでは Grezka (2006) の分類に基づいて, フランス語の視覚を表す動詞について確認する. まず, 視覚を表す典型的な動詞は *voir* と *regarder* であり, 意志性の観点から対をなして分析されることが多い. 前者は主体が受け手となる受動的な知覚であり, 後者は主体が自らの意志によって知覚を行う場合が多いとされている. また, 意味の拡張が見られ, 特に *voir* は, *Je vois le problème* (その問題が分かる) というように, 主体の認知を表す場合にも用いられ, 多義であることが知られている. さらに, *voir* はフランス語の動詞の中でも *être*, *avoir*, *faire*, *dire*, *pouvoir*, *aller* に次いで 7 番目に, *regarder* は 19 番目に使用頻度が高い動詞<sup>4</sup>である. Grezka (2006) の *voir* と *regarder* の分類をまとめると以下のように表すことができる.

[表 1 : Grezka の分類]

視覚 (直接知覚)	受動的視覚	視覚能力 ( <i>voir</i> <sub>1</sub> ), 視覚感度 ( <i>voir</i> <sub>2</sub> ), 受身的視覚 ( <i>voir</i> <sub>3</sub> ), 場所や対象の視覚的特性 ( <i>voir</i> <sub>4</sub> )
	能動的視覚	実際の視覚 ( <i>regarder</i> <sub>1</sub> ), 表示 ( <i>regarder</i> <sub>2</sub> ), 見世物 ( <i>voir</i> <sub>5</sub> , <i>regarder</i> <sub>3</sub> ), 閲読 ( <i>voir</i> <sub>6</sub> , <i>regarder</i> <sub>4</sub> ), 探索 ( <i>regarder</i> <sub>5</sub> ), 監視 ( <i>regarder</i> <sub>6</sub> ), 視覚による検査 ( <i>voir</i> <sub>7</sub> , <i>regarder</i> <sub>7</sub> ), 訪問 ( <i>voir</i> <sub>8</sub> )
視覚から認知へ		(見て) 知っている ( <i>voir</i> <sub>9</sub> )
認知	表象	幻想( <i>voir</i> <sub>10</sub> ), 想像 ( <i>voir</i> <sub>11</sub> ), 予言 ( <i>voir</i> <sub>12</sub> )
	知的活動	確認 ( <i>voir</i> <sub>13</sub> ), 考慮 ( <i>voir</i> <sub>14</sub> , <i>regarder</i> <sub>8</sub> ), 態度 ( <i>regarder</i> <sub>9</sub> ), 判断 ( <i>voir</i> <sub>15</sub> ), 着想 ( <i>voir</i> <sub>16</sub> ), 理解 ( <i>voir</i> <sub>17</sub> )

このように, *voir* と *regarder* は直接知覚の中でも能動的知覚, 認知知覚の中でも知的活動と言われるカテゴリーにおいては競合している. しかし, 受動的知覚, 主体が視覚を通じて認知する場合, 認知知覚の中でも対象が実際に眼前に存在するわけではない表象を表す場合においては *voir* の使用が優勢であることがわかる.

<sup>4</sup> Ministère de l'Éducation nationale et de la jeunesse が公開している Liste de fréquence lexicographique による. <https://eduscol.education.fr/cid50486/liste-de-frequence-lexicale.html> (最終閲覧 2019 年 8 月 14 日)

## 2.2. 日本語の視覚動詞

日本語の視覚動詞を見てみると (cf. Kijima 2017), フランス語の *voir* に対応するような, プロトタイプの動詞は「ミル」であるが, 視覚を表す「ミル」に対応する漢字は, 見, 観, 視, 診, 看, 覧のように, 複数存在する. また, これらの中でも使用頻度の高い「見」に限定しても, 「見える」「見かける」「見つめる」「見わたす」のような派生動詞や, 「見る」が副詞の修飾を伴う「ちらっと見る」「じっと見る」「かいま見る」「しげしげと見る」のような表現が数多く存在する. 日本語で視覚を表す典型的な動詞「見る」の用法を分類してみると以下のようにまとめることができる.

[表 2: 「見る」の用法分類]

純感覚的用法	能動的知覚	実際の視覚 (miru <sub>1</sub> ), 見世物 (miru <sub>2</sub> ), 閲読 (miru <sub>3</sub> ) 監視 (miru <sub>4</sub> ), 視覚による検査 (miru <sub>5</sub> )
意思的用法	知的活動	態度 (miru <sub>6</sub> ), 発見 (miru <sub>7</sub> ), 考慮 (miru <sub>8</sub> )
	行為を伴う	調整 (miru <sub>9</sub> ), 世話 (miru <sub>10</sub> )
定型表現		メタファーによる派生 (miru <sub>11</sub> )
		状況を経験 (miru <sub>12</sub> ), 状況の出現 (miru <sub>13</sub> )

この「見る」の用法分類を先ほど [表 1] で確認したフランス語の視覚を表す動詞の分類と比較すると次の [表 3] のようになる. 表 3 では, フランス語の *voir* と *regarder* が「見る」以外に対応している場合, 日本語に訳す際に最も頻繁に使用すると推測される動詞を対応させた.

[表 3: 「見る」とフランス語の視覚動詞の対応関係]

身体的知覚	受動的視覚	<i>voir</i> <sub>1</sub> , <i>voir</i> <sub>2</sub> , <i>voir</i> <sub>3</sub> , <i>voir</i> <sub>4</sub> → 見える
	能動的視覚	<i>regarder</i> <sub>1</sub> → <i>miru</i> <sub>1</sub> ; <i>regarder</i> <sub>2</sub> → <i>miru</i> <sub>2</sub> ; <i>voir</i> <sub>5</sub> , <i>regarder</i> <sub>3</sub> → <i>miru</i> <sub>3</sub> ; <i>voir</i> <sub>6</sub> , <i>regarder</i> <sub>4</sub> → <i>miru</i> <sub>4</sub> ; <i>regarder</i> <sub>5</sub> → <i>miru</i> <sub>5</sub> ; <i>regarder</i> <sub>6</sub> → 見張る ; <i>voir</i> <sub>7</sub> , <i>regarder</i> <sub>7</sub> → 調べる ; <i>voir</i> <sub>8</sub> → 訪ねる
知覚から認知		<i>voir</i> <sub>9</sub> → (見て)知っている
認知的知覚	表象	<i>voir</i> <sub>10</sub> , <i>voir</i> <sub>11</sub> , <i>voir</i> <sub>12</sub> → 見える
	思考	<i>voir</i> <sub>13</sub> → <i>miru</i> <sub>8</sub> ; <i>voir</i> <sub>14</sub> , <i>regarder</i> <sub>8</sub> → <i>miru</i> <sub>6</sub> ; <i>voir</i> <sub>15</sub> → 判断する ; <i>regarder</i> <sub>9</sub> → (...ように)見る ; <i>voir</i> <sub>16</sub> → 見抜く ; <i>voir</i> <sub>17</sub> → 理解する

上記の表から, 日本語の「見る」や「見える」と比べて, フランス語の *voir* や *regarder* は表す意味の幅が広いことは明白である. また, 日本語とフランス語の大きな違いとして, 同じような内容を表す場合であっても, *voir* と *regarder* の両方の動詞が使用できることが挙げられる. さらに, フランス語の視覚を表す動詞のプロトタイプは *voir* であるが, 辞書などには第一義として記

載されることの多い voir<sub>1</sub> から voir<sub>4</sub> に対応しているのは日本語のプロトタイプの「見る」ではなく、むしろ派生語とも言える「見える」なのである。このプロトタイプであるか否かという問題は、両言語の凝結表現を観察するとより明らかになる。次章から、視覚を表す凝結表現について考察してみよう。

### 3. 凝結表現とは？

まず、凝結表現そのものの定義について、日本とフランスにおける現状を確認しておこう。

#### 3.1. フランスにおける「凝結表現」

凝結表現に関する研究にはいくつかの問題点が指摘されている。まず、用語および定義が定まっていないことが挙げられる。その理由として、フランスにおいても凝結表現の研究は長年傍に置かれてきたこともあり、様々な呼称と定義が存在するからである。例えば Martins-Baltar (1997) では、フランスの研究者が慣用語法について使用した用語のリストを作っており、以下のような (括弧内がその語を使用した研究者名)。

- à-peu-près (Heinz, Rastier)<sup>5</sup>
- allusion (Rey)
- aphorisme (Mochet / Cintrat)
- circonlocution (Grimaldi)
- citation (Rey, Candel)
- cliché (Rey)
- collocation (Candel, Chanier / Fouqueré / Issac, Fónagy, Gentilhomme, Hausmann, Léon / Mazière, Leroy-Turcan, Rey)
- combinaison idiomatique (Bennet)
- composé (Gross, Schöen)
- construction (François / Grass, Hausmann, Rey)
- construction figée (Gross)
- dicton (Candel)
- énoncé lié (Fónagy, Martins-Baltar)
- expression (Grimaldi, Léon / Mazière, Rey)
- expression idiomatique (Candel)
- expression proverbiale (Mochet / Cintrat)
- expression semi-figée (Chantier / Fouqueré / Issac)
- façon de parler (Grimaldi, Leroy-Turcan)

---

<sup>5</sup> 括弧内のイタリック表記は Martins-Baltar (1997) による。

- fonction lexicale<sup>6</sup> (*Gentilhomme*, Gross)
- forme de langage particulière (Grimaldi)
- formulation (Hausmann)
- formule (Léon / Mazière, Rey)
- fragment lié (*Fónagy*)
- gallicisme (Rastier)
- groupement discursif (*Lewin / Mochet / O'Neil*)
- idiome (*Bennet*, Léon / Mazière, Rey)
- idiotisme prématique (Burger cit. par Gülich / Krafft)
- langue de bois (Branca-Rosoff, Fónagy)
- lexie complexe (Rey)
- locution (Grimaldi, Rey)
- locution nominale (*Gross*)
- locution plébée (Leroy-Turcan)
- locution terminologique (Candel, Rey)
- locution toute faite (Candel)
- manière de s'exprimer (Grimaldi)
- maxime (Rey)
- modèle locutionnel (*Martin*)
- mot (d'auteur) (Rey)
- mot composé (Corbin, Meunier-Crespo, Piguet)
- mot syntaxique (Corbin)
- palimpseste (*Galisson*)
- phrase faite (Grimaldi)
- phrase figée (*Fotopoulou*, Rey)
- phrase idiomatique (Kleiber cit. par Martin)
- phrasème (*Hausmann, Gréciano*, Rey)
- phrasème de spécialité (*Gréciano*)
- phraséolexème (*Gréciano*)
- phraséologisme pragmatique (Burger et al., cit. par Gülich / Krafft)
- phraséoterme (*Gréciano*)
- phraséotextème (*Gülich / Krafft*)
- proverbe (Candel, *Mochet / Cintrat*, Rey)
- schéma (Grunig cit. par Gülich / Krafft)

---

<sup>6</sup> この用語は、Mel'cuk によって導入されたものである。(Mel'cuk et al., 1992 : 127)

- séquence figée (Candel)
- séquence polylexicale (Gréciano)
- série phraséologique (Bally 1909 cit. par Gréciano)
- slogan (Rey)
- stéréotype (*Mochet / Cintrat*, Rey)
- structure préformée / préfabriquée (*Gülich / Krafft*)
- suite composée (Gross)
- syntagme figé (Corbin, Rey)
- syntagme idiomatique (Bennet, Corbin)
- syntagme terminologique (Candel, Rey)
- terme complexe (Candel, Rey)
- tour (Grimaldi, Léon / Mazière, Rey)
- tournure (Hausmann, Rey)
- unité phraséologique (Bally cit. par Gréciano)
- unité polylexématique (*Corbin*) (Martins-Baltar, 1997 : 23-24)

以上のように、1997 年の時点でも 67 の異なる呼称、定義が存在し、同じ研究者が異なる呼称を使用していることもよくわかる。このバリエーションに富んだ呼称を統一するため、これらの定義を全て含む概念として語彙文法理論において提唱されている「凝結」という概念を用いることにする。

「凝結」であると定義する特徴として、Gross (1996), Martin (1997), Mejri (1998), Gonzalez-Rey (2002), Svensson (2004) は、4 つの条件を挙げている。まず、構成要素の意味の組み合わせだけでは全体の意味が理解できないこと、次に対象が現働化されていないこと、つまり、対象が冠詞などの限定辞を伴わないこと、3 つめとして統辞的に固定していること、最後に組み合わせに制限があることを指摘している。凝結表現には単一の定義はなく、表現そのものが複数の語によって構成されているので、意味的、統辞的、形態論的にいくつかの凝結の段階が存在する。例えば、Gonzalez Rey (2007) は凝結表現に 3 つの大きなカテゴリーを認めている。

#### 1. Expressions idiomatiques (慣用表現)

- (i) 発話的：日常会話表現（習慣的形式、砕けた表現、オノマトペ）
- (ii) 連辞的：比喩的表現

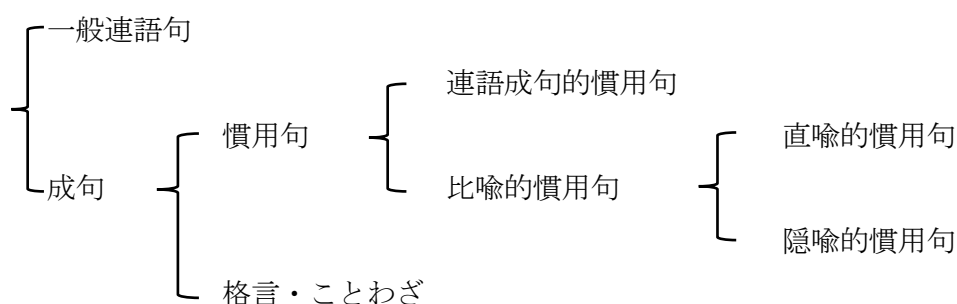
#### 2. Collocations (連辞特性)

#### 3. Parémies (諺と類似表現 — 格言、スローガン、など)

凝結表現の中にこれらの 3 つのカテゴリーを認めるのであれば、先に列挙した数多くの呼び名と定義はこれらのどれかに分類することができる。

### 3.2. 日本における凝結表現

日本における「慣用句」研究は、1970年代から本格的に始まったとされており、80年代以降に確立したと言われている。慣用句の定義として定着したのは、宮地 (1982) の「慣用句という用語は、一般に広く使われているけれども、その概念がはっきりしているわけではない。ただ、単語の2つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体でまとまった意味を持つ言葉だという程度のところが、一般的な共通理解になっているだろう」(宮地 1982 : 238) というものだろう。このような2つ以上の語の組み合わせから意味が想像できない場合は、「慣用句」という名称以外にも、慣用表現 (*idiome*)、定型表現 (*expression régulière*)、凝結表現 (*expression figée*)、凍結表現 (*expression glaçante*)、相当句 (*locution*) などと定義され、様々な理論によって分析されている。フランスにおける場合と同様に、日本においても呼称と定義は研究者によって異なることが多い。先に挙げた宮地 (1982) は80年代に以下のような分類を提示している。



[図1：宮地 (1982) の分類]

宮地はすでに、一般連語句以外を「成句」としており、これが Gross の言う「凝結表現」に相当する。その後、宮地の分類では成句の中の格言・ことわざ以外の「慣用句」とされる表現の研究が認知言語学を中心に発展することとなる。認知言語学では主に意味という観点から、慣用句と比喩の関連性、意味成分の分析を行っている。慣用句の中でも身体語彙を含む表現が多いのは知られているが、身体部位の本来の意味からの拡張という観点からの意味成分の分析であり、現在に至るまで、名詞句を中心とした分析が盛んに行われている。

近年では、外国人学習者向けの慣用句教育という見方も導入され、英語や中国語、ロシア語などとの対照研究、慣用表現の意味解釈における語用論的分析、コーパスに基づく意味変化の研究なども行われている。

日本語とフランス語の対照研究に類するものとして2ヶ国語以上の慣用句の対照研究を取り上げると、石田 (2015) が挙げられる。石田は日本語の慣用句に「意味的固定性」と「統語的固定性」を認め、英語を中心とする他言語との比較を行なっている。石田 (2015) の分析の特徴は、意味的、統語的特性を踏まえていることはもちろんであるが、これらの特性に階層性を認めている点である。慣用句の階層性を認めるかどうかは、研究者によって意見が分かれるが、石田 (2015) は、階層性を認め、「典型的なもの」から「周辺的なもの」への分類を目指している。



また、石田は意味的固定性を測る基準に統語的特性となる5つの基準を加えることによって、動詞慣用句に対する統語的操作を示し、そこに階層関係を認めている。以下が石田の示す動詞慣用句の階層関係である。

[表4：石田 (2015) の示す階層関係]

<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="width: 20px; height: 100px; background: linear-gradient(to bottom, blue, blue); margin-right: 5px;"></div> <div style="display: flex; flex-direction: column; justify-content: space-between; width: 20px;"> <span>低</span> <span>高</span> </div> </div>	①	名詞句への転換
	②	受身表現化
	③	命令表現化, 意志表現化
	④	連体修飾語の付加, 連用修飾語の挿入, 敬語表現化
	⑤	否定・否定表現化
	⑥	連用修飾語の付加, 慣用句の修飾成分化

(矢印は慣用句に各操作が容認される度合い)

例えば、「手を打つ」という慣用句であれば、①「打つ手がない」③「手を打て」④「思い切った手を打つ」というように変形操作が可能であるのに対し、「頭にくる」という表現の場合①「くる頭」とは言えないことから、「手を打つ」よりも固定性が高い表現として分類することができるのである。このような固定性を計るための変形操作は、Gross の「凝結度」を計るための変形操作と同じ操作内容が認められるため、これらの基準をフランス語と日本語の両方に適用できるような基準の構築を試みる必要があるだろう。次章で日本語の視覚を表す凝結表現について、辞書記述とコーパスでの使用の比較など、現状の把握を行うことにする。

#### 4. 視覚を表す動詞の凝結表現

視覚を表す動詞の用法については2章において確認したが、視覚を表す動詞を含む凝結表現はフランス語と日本語にも数多く存在する。仏仏辞典や仏和辞典において自由連辞の場合の意味定義以外に慣用表現、定型表現として、記載があるだけでも、voir は101表現、regarder は98表現になる。一方、日本語の場合「見る」が109表現であるのに対し「見える」は5表現だけである。

「見える」が使用される表現は「魚の目に水みえず」のような諺と「先が見える」という表現のみであった。視覚を表す名詞を含む場合を見てみても、フランス語では数が多い方から œil や yeux が50例、regard が27例となっているのに対し、日本語では「目」だけが131例と圧倒的に使用が多いことがわかる。この違いは日本語とフランス語の言語特性によるものであると考えられる。例えば、動詞に関して言うのであれば、フランス語では視覚を表す動詞のプロトタイプとして voir と regarder があり、両者の語源は異なっているのに対し、日本語の「見える」は「見る」の派生であり、元となる「見る」に凝結表現が多くなっているからである。本稿では、視覚を表す動詞の現状を把握することを目的としているため、どのような語が凝結表現の構成要素となりやすいなどの考察は脇に置いておくことにする。

#### 4.1. 辞典に記載されている凝結表現

凝結表現であるかどうか判断するために一般的に使用されるのは辞典である。辞典で調べることによって、凝結表現を正しく理解できているか、どのように解釈できるかを知ることができる。しかし、辞典によってのみ判断することは、いくつか問題点がある。日常で使用される凝結表現が常に辞典に載っているわけではないこと、辞典に記載されている凝結表現が全て重要というわけではないこと、使用頻度が高く辞典の助けがないと意味が理解できない表現であっても記載されていない場合があることなどである。加えて、辞典に記載されている表現が実際の使用頻度に基づいて更新されることはあまりなく、現在では使用されることが稀な表現の記載が多いなどの問題も見受けられる。つまり、辞典の記載に関しても、どのように記載する凝結表現を選出しているのか？同じ表現を扱う辞典であっても、表現の記載方法に若干の違いがあるのはなぜか？という疑問が生じるのである。



[図 2: 仏仏辞典の例]

上記の図2は仏仏辞典 *Le Petit Robert* の例<sup>7</sup>であるが、凝結表現に関しては、*Locution* (成句) として記載されているものの、使用に関する情報が乏しい。つまり、統辞的制約や意味に関する情報が少なく、フランス語学習者が辞典だけを頼りに実際に使用するのは難しい。また、*Locution* として記載されている表現の分類などは一切ないことがわかる。同様に、日本語の単一言語辞典として三省堂『大辞林』<sup>8</sup>を見てみると、慣用表現として以下のように記載されている。

<sup>7</sup> 赤の囲み線および赤の下線は引用者による.

8 三省堂『大辞林』第三版から引用。https://www.weblio.jp/cat/dictionary/ssdj (最終閲覧日 2019 年 8 月 28 日)  
赤字は引用元のまま記載。

【慣用】足下（あしもと）を一・大目に一・血を一・泣きを一・日の目を一・目八分に一・余所（よそ）に一／様（さま）をみる・それみたことか

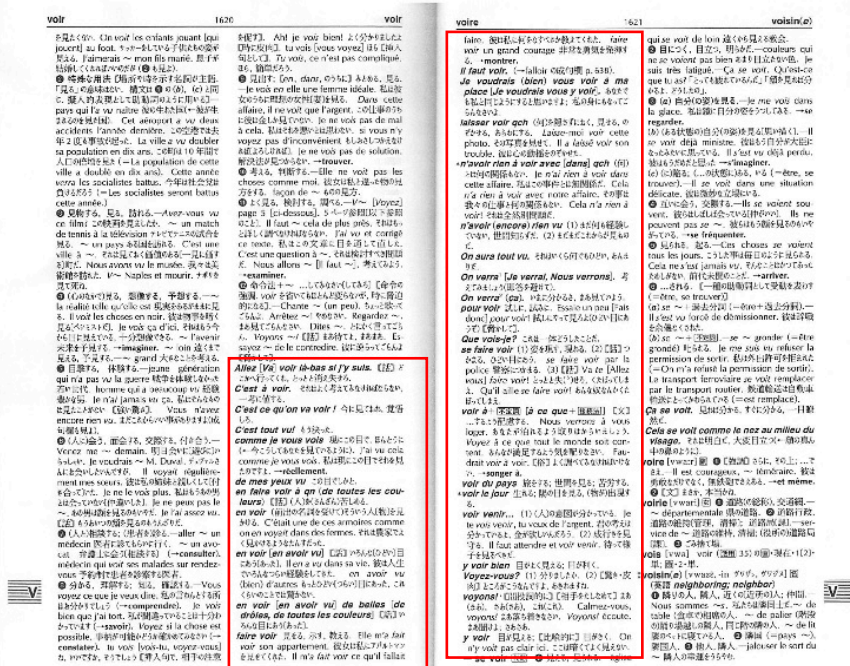
【表記】みる（見・観<sup>▽</sup>・診・看<sup>▽</sup>）

「見る」は“物の形や色を目で感じる。判断する”の意。「窓の外を見る」「テレビを見る」「朝刊を見る」「湯加減を見る」「世間を甘く見る」「見ると聞くとは大違い」「**観る**」は“見物する。眺める。芝居などを鑑賞する”の意。「見る」とも書く。「桜を観に行く」「芝居を観る」「**診る**」は“診察する”の意。「医者に診てもらう」「患者の脈を診る」「**看る**」は“気を配って世話をする”の意。「病気の親を看る」「病人を看る」

【句項目】見ての極楽住みでの地獄・見ての通り・見て見ぬ振り・見ぬ商いはできぬ・見ぬが花・見ぬ京の物語・見ぬこと清し・**見ぬ世の人を友とす**・見も知らぬ・見る影も無い・見る事は信ずる事なり・見ると聞くとは大違い・見るに忍びない・見るに堪えない・見るに見かねる・見るも法案聞くも法案・見れば見るほど・見れば目の毒

【図3：『大辞林』の「見る」の項目】

この場合も同様に、慣用表現であることはわかるが、その意味などはまた別に調べる必要があり、外国語学習者の視点に立つと、この表記だけでは理解できないことが多いことは明らかである。では、外国語学習者が使用する二言語辞典の場合を見てみることにする。『クラウン仏和辞典』の voir の項目を見てみると、次のようになっている。



【図4：『クラウン仏和辞典』の voir の項目】

仏和辞典に関しては、例えば上記のような日本人向けのものは日本国内でもある程度の数が出版されており、学習者向けに工夫がされている。しかし、和仏辞典は数も少なく、慣用表現の記載は十分ではない。フランス人向けの和仏もしくは仏和辞典はより数が少なく、辞典の内容も簡単なものばかりであり凝結表現の記載がないものがほとんどであった。例として、インターネット

で見つけた和仏辞典<sup>9</sup>の例を以下に挙げる。

21 résultats pour la recherche "見る"		
みる	見る	observer, contempler, admirer, regarder, surveiller; prédire
	みる	Peut aussi s'écrire 視る ou 観る.
じっとみる	じっと見る	regarder fixement
	じっと見る	見る (minu) : groupe 1
じつとみる	じつと見る	
みるみるうちに	見る見るうちに	à vue d'oeil
	見る見るうちに	de façon visible
みるみる	見る見る	très vite, changer vite, bouger vite
	見る見る	Quelque chose que l'on peut voir changer à vue d'oeil.
みるみる	見る見る	
ゆめみる	夢見る	rêver
	夢見る	
よくみると	よく見ると	en regardant mieux; plus attentivement
	よく見ると	
かいまみる	垣間見る	entrapercevoir
	垣間見る	
のぞみ見る	望み見る	regarder au loin, contempler
	望み見る	
あおぎみる	仰ぎ見る	regarder en haut; respecter
	仰ぎ見る	Peut aussi s'écrire 仰見る ou あおぎ見る.
あおぎみる	仰ぎ見る	
ゆめをみる	夢を見る	rêver
	夢を見る	
あまくみる	甘く見る	sous-estimer, prendre à la légère, ne pas prendre au sérieux
	甘く見る	
うんはいをみる	運勢を見る	dire la bonne aventure, prédire l'avenir de quelqu'un
	運勢を見る	

[図 5：インターネットの和仏辞典]

対訳辞典での凝結表現の記載方法という観点から、最後に和英辞典<sup>10</sup>をあげておく。

▶みる 見る	✕
1 〈…を(目で)見る〉 look 〈at〉; take [have] a look 〈at〉; set [lay] eyes 〈on〉	
《★主に否定文で》; 〈驚いているもの・変化の期待されるものを見ている〉 watch; 〈見える〉 see; 〈不意・好奇などの念をもって〉 eye; 〈見つめる〉 stare [gaze] 〈at〉; 〈目撃する〉 witness	
ぞっと見る	
• run one's eyes through	
• glance over	
疑いの目で見える	
• eye somebody suspiciously	
ちらりと見る	
• glance 〈at〉	
注意して見る	
• watch	
よく見る	
• look hard 〈at〉	
• have [take] a good [careful] look 〈at〉	
見る見る、見る間に	
• in a moment	
• in an instant	
• every moment	
• fast	
見るからに	
• evidently	
…を見て	
• at the sight of...	
ちよつと(ひ)と目(見)て	
• at first sight	
• at a glance	
見て楽しむ	
• enjoy the sight 〈of〉	
見て見ぬふりをする	
• pretend not to see something	
• close one's eyes 〈to〉	
• turn a blind eye 〈to〉	

#### 見るに忍びない

- 見るに忍びなかった。I could not bear to see it. | I could not stand the sight of it.

#### 見るに耐えない

- その恐ろしい光景は見るに耐えなかった。I could hardly bear [【形式ばった表現】 endure] to look at the dreadful scene.

#### 見るに見兼ねて

- being unable to stand (idly) by (any longer)
- 見るに見かねて経済的援助を申し出た。Unable to stand by any longer, I offered to help him financially.

#### 見るからに

- その果物は見るからにうまそうだった。The fruit looked tempting.

#### 見る影もない

- be miserable; be wretched
- 〈以前に比べて〉【形式ばった表現】 be a mere shadow of one's former self
- 彼は今や見る影もなくなった。He is a mere shadow of what he used to be.

#### 見ての通り

- 見てのとおりひどい怪我です。He is seriously wounded, as you (can) see.

[図 6：和英辞典の「見る」の英訳と凝結表現の記述]

このように、様々な辞典を見るだけでも、記載する凝結表現の選出方法や記述方法は辞典ごとに異なっていることが多く、特に日本語に関するフランス語での記述は改善もしくは発展させる余地が多く残されている。これらのことから、日本語の凝結表現に関して、視覚を表す「見る」を例に、もう少し詳しく考察してみることにする。

<sup>9</sup> <http://9.dee.cc/~hakase2/>

<sup>10</sup> 研究社『新和英中辞典』より

## 4.2. 「見る」の凝結表現

日本語の凝結表現の分析においても意味的特徴と統辞的特徴の両方を考慮しなければならないことは確かである。14の辞書に記載されている109もの「見る」が含まれている凝結表現について統辞的特徴を考慮すると、いくつかの特徴が確認できる。辞書に記載のある109表現のうち、実際にコーパス<sup>11</sup>において使用が確認された表現を抜き出すと102表現、6954例あり、その統辞的特徴と例文数は以下の通りである<sup>12</sup>。

1. 諺・格言 (木を見て森を見ず, 親の顔が見たい, など)	190 例
2. 名詞化 (見た目)	1784 例
3. 副詞化 (見るからに, 見る間に)	622 例
4. 動詞が変化 (目を見張る)	280 例
5. 見る X (見るところ, 見る人)	1639 例
6. Xを見る (味を見る, 血を見る, など)	2079 例
7. Nで見る (長い目で見る, 色眼鏡で見る)	133 例
8. Nに見る (大目に見る, 下に見る)	136 例
9. Adj.見る (甘く見る)	91 例

上記の結果を見てみると、1～4は全体の41%にのぼる。これらの表現は構成要素がある程度固定されており、任意の語句に変更することが難しいことから、凝結度が高い表現であると言える。5～9までの表現では全体の59%であり、それぞれXやNなど、バリエーションが確認できる。9に挙げた形容詞は、「甘く見る」しかコーパスでは確認できなかった。この5～8までの比較的多くの例が見つかった表現の統辞的特徴をさらに詳しく見てみることにする。「見る」の文型として『日本語文型辞典』には6文型<sup>13</sup>が記されている。これらの文型となるのは、名詞句として使用される「見る X」を除く6～8の表現となる。ここで、もう一度6～8と文型を比較すると、I. ...をみる, III. にみるの2つとなる。

### 4.2.1. 「Nを見る」型

『日本語文型辞典』では、I. ...をみる型の例として12の例文が記載されている。

- (2) テレビを見るのが好きだ。
- (3) 窓からぼんやりと雲が流れて行くのを見ていた。
- (4) この頃は忙しくて新聞を見る暇もない。

<sup>11</sup> コーパスは国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス、少納言」を使用した。  
<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/> (最終閲覧日 2019年8月28日)

<sup>12</sup> Xには名詞、接続助詞、助動詞、動詞を含む。

<sup>13</sup> 『日本語文型辞典』における「見る」文型は1....をみる, 2.Nを...みる, 3. にみる, 4. ...ところをみると, 5. V-てみる, 6. ...からみると, の6つである。

- (5) 料理の味を見てください.
- (6) 風呂の湯加減をみる.
- (7) しばらく反響を見てみよう.
- (8) 機械の調子をみる.
- (9) 近所のおばさんに子供の面倒をみてもらっている.
- (10) もしよかったら, うちの子の勉強を見てもらえませんか.
- (11) あの人の言うことを全部本気にしていると馬鹿をみるよ.
- (12) あの人は子供の時からずっと辛い目を見てきたのだから, 今度こそ幸せになって欲しい.
- (13) 作品は 20 年後に完成を見た.

これらの例の説明として,

「目でみる」という基本的な意味のほか「舌や手などを使って調べる」「世話をする」などの意味がある. (11)(12) は慣用的な表現でそのような経験をするという意味. (13) は書き言葉的な硬い表現で「長い時間がかかってやっと完成した, 成功した」という意味である (『日本語文型辞典』, p.564)

と記載されている. この説明によると (11) と (12) が慣用句であり, その他は自由連辞であるという解釈が成り立つ. しかし, 辞書の記載を確認してみると, 上記の (5) や (6) は凝結表現であるとされている. 実際に「N を見る」という統辞形式で, 凝結表現として記載があった表現の N の内容ごとのコーパスにおける使用頻度を調べると, 次のようになっている.

[表 5 : 辞書の記述と使用頻度]

夢	911	時	33	馬鹿	18
面倒	493	決着	31	脈	15
味	126	地獄	30	曙光	3
足元	82	痛い目	24	いい目	2
日の目	67	憂き目	22	火加減	1
血	53	隙	22		

石田 (2015) では, 動詞慣用句の階層性を調べるために, ①名詞句への転換, ②受身表現化, ③命令表現化, 意志表現化, ④連体修飾語の付加, 連用修飾語の挿入, 敬語表現化, ⑤否定・否定表現化, ⑥連用修飾語の付加, 慣用句の修飾成分化という 6 要素を挙げていた. これらの基準を実例が 50 以上見つかった表現に当てはめると, 次のようになる.



[表 6：「Nを見る」の階層性の検証]

	名詞句	受身	命令	修飾	否定	連用修飾
夢を見る	○	○	○	○	○	○
面倒を見る	×	○	○	○	○	○
味を見る	×	—	○	○	○	○
足元を見る	×	○	?	?	○	○
血を見る	×	×	×	○	○	○
日の目を見る	×	×	×	○	○	○

上記の表からもわかるように、「夢を見る」がこれら 6 つの表現の中では意味的固定性が低く、「見る夢」「夢を見られる」「夢を見ろ」「怖い夢を見る」「夢を見ない」「夢を見る少年」と、全ての變形操作が可能となる。ここで、いくつかの問題が生じる。使用頻度が 4 番目に多かった「足元を見る」では、特殊な状況では命令表現化や意思表現化が可能となるだろう。しかし、実際にコーパスにおける使用を観察してみると使用例は見つけられなかった。また、「味を見る」では「味加減を見る」と解釈でき、そうすると「火加減」「湯加減」などとも共通する。また同様に「日の目を見る」は「痛い目」「憂き目」「いい目」など、「～目を見る」という形式の一つであるとも考えられる。これらのことから、「Nを見る」型であっても、N の要素に着目する必要があり、今後細分化が可能であると考えられる。

「Nを見る」型とは別に、辞書の記載から「Nで見る」という形式の凝結表現を 4.2.節の最初に提示したが、この「Nで見る」型は「長い目で見る」「白い目で見る」「色眼鏡で見る」の 3 表現であった。この表現形式は文型としては分類されていないが、「物事を長い目で見る」や「相手を白い目で見る」など「Nを」の部分に補うことが容易であることから、I. ...をみるに含むことが可能である。この「Nで見る」型については「Nを見る」型との関連性も含めて、今後の分析課題とする。

#### 4.2.2. 「Nに見る」型

最後に、N に見る型を確認してみよう。『日本語文型辞典』における例文は以下のようなものである。

- (14) 最近の新聞の論調にみる経済偏重の傾向は目にあまるものがある。
- (15) 今回の地震は、近年まれにみる大災害となった。
- (16) 《新聞や雑誌などの見出し》アンケート調査にみる大学生の生活実態と金銭感覚 (564)

これらは「...にみられる」という意味で使用されているが、辞書の記述から分類した「Nにみる」

型とは意味が異なる。辞書に記載され、コーパスによって使用が確認された表現としては「大目に見る」「最目に見る」「下に見る」の3種類であった。これらの表現は(14)や(16)のような「YにみられるX」という意味にはならない。(15)の「近年まれに見る」という表現も、その後のXに値する「大災害」を修飾していると考えられることから、同じ「Nに見る」という形式であっても「Yに見るX(N)」という別の統辞形式であり、自由連辞と凝結表現では統辞形式が異なることは明らかである。

以上、「見る」の6つの文型と凝結表現として辞書に記載の文型を照合し、「Nを見る」と「Nに見る」について考察を行った。最も頻繁に用いられる文型は「Nをみる」であるが、凝結表現となり得るNは定まっておらず、細分化の必要がある。また、実際に辞書記述とコーパスにおける使用頻度を比較してみると、文型には当てはまらない名詞句として使用される場合も数多く観察されている。このような名詞句化される場合の分類基準というものがまだ定まっていないという現状が確認された。

## 5. おわりに

近年研究が活発になりつつある凝結表現について、日本語とフランス語の対照研究の第一歩として、用語と定義の確認、視覚を表す動詞をサンプルとして辞書記述と実際の使用の確認を行った。凝結表現に関する呼称や定義は研究者によって異なる場合が多く、アプローチの方法も異なっている現状を鑑み、現状を把握し、今後の発展の可能性を探ることに努めた。

さらに、辞書記述の現状と国語辞書と二か国語辞書の機能の違いを考慮するためにも、両タイプの辞書記述を確認した。具体的な分析として、本稿では日本語を取り上げ、コーパスにおける日本語の視覚を表す動詞「見る」が含まれる凝結表現の使用を、「見る」の文型と照合し、凝結表現の傾向を提示した。「Nを見る」型と「Nに見る」型を取り上げたが、特に「Nを見る」型ではNの性質を考慮する必要がある。今後より詳細な分析を行い、視覚を表す凝結表現について、様々な観点からのアプローチを行う予定である。

## 参考文献

- Balibar-Mrabti, A. & Vaguer, C (2005) : « Présentation. Le semi-figement », *Linx* 53, pp.7-15.
- Bat-Zeev Shyldkrot, H. (1989) : « Les verbes de perception : étude sémantique », in : KREMER Dieter (ed.), *Actes du XVIIe congrès International de linguistique et philologie romanes*, Tome 4, pp. 282-294.
- Dannell, K. J. (1992) : « Nothing but phrases. About the distribution of idioms and stock phrases », in : Edlund, Lars-Erik / Persson, Gunnar (éds.), *Language : The Time Machine*. – Umeå : Umeå University.
- Franckel J. -J. et D. Lebaud (1990) : *Les figures du sujet. A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Paris, Ophrys.
- Gonzalez-Rey, I. (2002) : *La phraséologie du français*, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail.
- Gonzalez-Rey, I. (2007) : *La didactique du français idiomatique*, Fernelmont (Belgique) : E.M.E. Éditions.



- Greza, A. (2009) : *La polysémie des verbes de perception visuelle*, Paris, L'Harmattan.
- Greza, A. (2016) : « Classes et relations sémantiques : l'exemple du verbe *regarder* », *Neophilologica* 28, pp.72-97.
- Greza, A. et A. Kijima (2019) : « L'expression de la perception visuelle : regard franco-japonais », *Lexis Journal in English Lexicology, Lexicon, Sensation, Perceptions and Emotions*, 13  
(<https://journals.openedition.org/lexis/3105>)
- Gross, G. (1996) : *Les expressions figées en français*, Paris, Ophrys.
- Gross, G. (2012) : *Manuel d'analyse linguistique*, Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion.
- Gross, M. (1982) : « Une classification des phrases figées du français », *Revue québécoise de linguistique*, Vol. 11, No 2, Montréal, Presses de l'Université du Québec à Montréal, pp. 151-185.
- Gross, M. (1988) : *Grammaire transformationnelle du français*. 3. Syntaxe de l'adverbe, Paris, Cantilène.
- Kijima, A. (2017) : *Étude comparée des verbes de perception visuelle en français et en japonais*, Thèse de doctorat en Linguistique, Université de Franche-Comté.
- Leeman, D. et M. Sakhokia-Giraud (2007) : « Point de vue culiolien sur le verbe *voir* dans *Les verbes français* », *Langue française*, 153, pp.58-73.
- Mejri, S. (1998) : « La conceptualisation dans les séquences figées », *L'Information Grammaticale* 2, Numéro spécial Tunisie, pp.41-48.
- Mejri, S. (2007) : « French phraseology », *Ein internationale Handbuch der zeitgenössischen Forschung / An International Handbook of Contemporary Research*, pp.682-690.
- Mogorrón Huerta, P. (2010) : « Peut-on traduire les expressions figées », *Les Cahiers du CENTAL* 6, *Les tables. La grammaire du français par le menu*, pp.251-264.
- Muller, C. (2002) : *Les bases de la syntaxe. Syntaxe contrastive français-langues voisines*, Pessac, Presses Universitaires de Bordeaux.
- Pioche, J. (1986) : *Structures sémantiques du lexique français*, Paris, Éditions Nathan.
- Senellart, J. (1998) : « Reconnaissance automatique des entrées du lexique-grammaire des phrases figées », in Lamiroy, B. (éd). *Le lexique-grammaire. Travaux de Linguistique*, 37, pp.109-127.
- Senellart, J. (1999) : *Localisation d'expressions linguistiques complexes dans de gros corpus*, Thèse de doctorat, Université Paris 7.
- Svensson, M.-H. (2004) : *Critères de figement. L'identification des expressions figées en français contemporain*, Umeå : Umeå University.
- Tesnière, L. (1988) : *Éléments de syntaxe structurale*, Paris, Éditions Klincksieck.
- Viguié, M.-H. et A. Greza (eds) (2017) : *Figement en mouvement et complexité en devenir : regards sur quelques problèmes liés aux structures défigées et complexes*, *Revue ELA (Études de linguistique appliquée)*.
- 石田プリシラ (1998) : 「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって」 『筑波応用言語学研究』 第7号, pp. 43-56.
- 石田プリシラ (2000) : 「動詞慣用句に対する統語的操作性の階層関係」 『日本語科学』 第7号, pp.24-43.

- 石田プリシラ (2004): 「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法—統語的操作を手段として」 『国語学』 第55 巻第4 号, pp.42-56.
- 石田プリシラ (2015): 『言語学から見た日本語と英語の慣用句』 開拓社.
- 木島愛 (2016): 「凝結表現 *n'avoir rien à voir* に関する考察」 『パロールの言語学, フランス語学研究』 50 号別冊, pp.51-70.
- 国広哲弥 (1985): 「慣用句論」 『日本語学』 4(1), 明治書院, pp.4-14.
- 宮地裕 (1982): 『慣用句の意味と用法』 明治書院.
- 土屋智行 (2009): 「日本語定型表現の体系的分類に向けて: 特に辞書記述に基づく慣用表現とことわざの分析を中心に」 『言語科学論集』 15, pp. 55-77.

(きじま あい / 千葉工業大学准教授)